

「子守歌、わらべ唄、面瀬の唄」

小野寺憲雄氏のお話から

これは、子守歌かもしれない。昔話と言えはそうだし、内容はわらべ唄かもしれない。子どもたちは歌が好きだ。「好き」というより、子どもたちが語りついでゆくのか。はたまた、お家の人に歌われて心に残るものなのか。小学生時代に、たしか、こんなはやり歌があった。「葉っぱは青い、青いは海、海は深い、深いは便所……」「これは何歌というのか。何十年も経ってしまった、歌詞も断片的にしか出てこない。でも子どもたちみんなは唄っていた。

平成二十五年六月十一日に、五年生の総合的な学習の講師として学校におい

でになった小野寺憲雄氏に、以前お伺いした三つの「子守歌」について、再度お願いし、その歌の詞についてお聞きした。小野寺氏から後日、紙面でお届けいただいた。

この子守歌は、小野寺氏が幼少の頃に、寝るときにお祖父さんに抱かれながら唄ってもらったものだそう。内容を見ると断片的な語りが続いく。全体を通じた要旨というものは把握しづらい。しかし、フレーズとフレーズの間にはどこか関連性がある。前出の歌「葉っぱは青い……」に似ている。ただ、「葉っぱは青い……」は連想ゲームのように前後の単語で関係づけられて続いていくが、小野寺氏の子守歌は少し違う。どこかや何かを物語っているのだということとは分かるが、はっきりしない。

「新・面瀬の昔ばなし」に、なぜこの三つの「子守歌」を取り入れたかという点、このような貴重な伝承があったことを記録として残すためである。読者には、この子守歌はきつと、全く初めての新奇なものであるだろう。だからこそ紹介することにした。読んでみて、ぜひ、口ずさんでみてください。どのように感じられるでしょうか。

その一

「向いの山の 萱刈りは

新五郎殿か五郎殿か五郎殿か五郎殿ご座してお茶あがれ。
お茶菓子は何々 天下一の香箱
中 あげで みだれば
赤い小袖満つみつ 白い小袖満つみつ
三つになる和子は どごがら降りだ。
天がら降りた。 何々着て降りた。
袴着て 降りた。袴の色は 何色染まった。
きうり木楔に ざつきり切った小刀
小刀の鞘は 一ぬ木 二の木 三の木。
桜、五葉松、柳。



柳の下に どうひと書いて
晩げは誰れ 誰れ呼ばんべ。
八瀬の弥太郎に 小山の別当
猿は盃 それつげ やれつげ つごぼした。
早く寝らいん。」

その二

「おら前の じさぬぎさ ちよんちよこ鳥こが とまった。
なにして 首っこ まがった。

腹こへつて まがった。
腹こへつたら 穂つ田さ おりで 穂拾え。
ひろい穂拾えば 足つこが よこれる。
よこれだば 川さ入って かつぎ洗え。
かつぎ やれば 足こがつめて
つめてがったら あだれ



あだれば熱^あつ
あつがたら寝^ねろ。
寝^ねれば ノミ^ねっこに ちっくら もっくら かれる。
早く 寝^ねらいん。」

その三

「お月さま からさんま 鉈^{なたい}一丁 お貸^かしなせえ。

何 切る鉈^{なた}を。

桐^{きり}の木 切る鉈^{なた}を。

桐^{きり}の木の下に 美しい嫁^{よめ}御^ごさんが 髪^{かみ}しっぽどげ ゆってだ。

どごさ 嫁^{よめ}さる。

山田^{やまだ}さ 嫁^{よめ}さる。

山田^{やまだ}の径^{みち}は 大蛇^{へび}小蛇^{へび}

小蛇^{へび}の御^お方^{かた} 山椒^{さんしょう}におせで あぶなぐ 死^しんだどや。

はい、あどは寝^ねらいん。」



こんなことから、面瀬の諸先輩方は、面瀬にまつわる音曲をお持ちになった。まずは、三十周年実行委員会名誉委員長熊谷勝先生。先生がお持ちになったのは「はてな会同人」による歌集のコピーのようであった。この「はてな会」という同人誌は、昭和二年の第十三号で休刊となったそうである。前置きはこのくらいにして、「面瀬川のうた」という収録歌を紹介する。

一

わたしや面瀬川、神山川どあ
今ぢやこうして、別^{わか}れているが
同じ天から、一しよに降^ふった
おらは昔^{むかし}の 仲^{なつ}よし同志

二

流れ流れて 明日にも海で
またも一しよに なるみの水じや

人は浮世を 悲しとなくが

おらは毎日 チャラチャラうたう

内容は、解説するまでもないが、水の循環を、悟りの境地からうたった、ともいえる。また、面瀬川と神山川を一緒と言っていることから、川を流れる水を通して、松岩村の団結をうたっているのかもしれない。もしかすると、松崎村と赤岩村の、明治八年の合併のしこりがあつて、それを何とかしようという心も、あるのかもしれない。「一しよ」が一節目、二節目ともあるのがその証左かもしれない。

次に紹介するのは、三十周年実行委員会委員長の佐藤正儀氏の提供である。昭和年代の後期の曲調であることから、きっと昭和か平成初期の作詞作曲だと思つていたところ、後出の藤田孝子様から、制作は昭和五十年代であるとうかがつた。作詞は松岩の小野寺義市氏、作曲は小松しげお氏、もしくは大里医院長の大里篤志先生。どちらかが作曲でどちらかが編曲なのかもしれない。題名は「面瀬川慕

情」である。制作当時は、振り付けもあり、各地区で衣装まで作つて踊つていたそうだ。歌詞を紹介する。

一

小枝こえだつんだ氷こおりの花が

とけて歌うか せせらぎに

春を夢見る 川柳

愛の流あいれの紅研べにとぎ石で

とめておりとき川の宿

浮うき名残のこした 面瀬川

二

思い切ひとめれずに人目をしのび

二人歩かわぎしいた川岸に

黄色にふくらむ山吹やまぶきの花に

さきがけ あなたと咲いて

恋の一文字 川の宿
惚れて流れる 面瀬川

三
水面かわして 飛ぶかわせみが
愛をむすんだ 思い出の
流れ彩る 草の道
いとし面影 手をとりもとめ
ひとりたずねる 川の宿
夢もせつない 面瀬川



歌詞は男女の慕情をうたうが、面瀬川の冬は氷の花、春は山吹、夏はカワセミを背景にしている。また各節に「川の宿」とあるが、これは慕情の拠り所を面瀬川にもうけたものである。このように詩情豊かに歌い上げられて、面瀬川も大人のロマンの対象になっているのである。

最後に、最近の面瀬を歌った歌。これは平成二十二年度に面瀬地区振興協議会の募集に応募した作品で「歌おう踊ろう・面瀬ふるさと音頭」というもの。作詞作曲は優秀賞を得た藤田孝子さん。震災後、平成二十四年七月になって、面瀬中学校で踊りと共に紹介された。歌は小野寺明子さん、踊りは三浦洋子さんです。

一
おらが面瀬に 来てみなハレセ
西に山なみ 東は海よ
中を流れる 面瀬川(ア、ソーレ)
生命育む水辺に遊ぶ(チヨイト)
子らの笑顔が郷土の宝



おらが面瀬は お聞きなハレセ

二つの流れが 合あわさありて

大きな流れに幾いくと年月しつきを(ア、ソーレ)

今いまじや学まなびに趣しゆみ味あじスポーツスポーツに(チヨイト)

熱ね気っき盛さかんが 郷きよ土との自じ慢まん

三

おらが面瀬に はまりなハリセ

老おいも若わかきも 男おとこも女めも

共ともに働はたらき 笑わら顔かほで暮くらす(ア、ソーレ)

新あたらしい風かぜも吹ふき込こむ里さとは(チヨイト)

面瀬おんせ音頭おんどの 輪わで和わをつくる

面瀬のよさをすべて歌い上げたみごとな歌詞で、ロザさむだけで元気が出る。一番は、面瀬の自然を山川海とうたう。「子らの笑顔が郷土の宝」とは、面瀬小の環

境教育を表しているようだ。二番は、面瀬地区の地区民が、生涯学習に取り組む熱気を表している。何といってもこの地区は、三十才の若さだ。三番は、老若男女が笑顔で暮らす様子を表している。仲良い和の輪が広がる地区なので「面瀬にはまりなハリセ」ときそう。

ドイツの詩人が言った。「心に太陽を、唇に歌を」と。